

中嶋長文先生

著者	佐藤 晴彦
雑誌名	神戸外大論叢
巻	55
号	1
ページ	1-4
発行年	2004-09-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1085/00000973/



中嶋長文先生

佐藤晴彦

中嶋長文先生が本年3月をもって定年退職された。神戸外大へは86年に赴任されたというから18年の永きにわたって、研究、教育に努められたことになる。これほどの先生でも、「定年」という制度があるため、これ以上勤務していただけないというのは実に残念なことである。

中嶋長文先生の研究領域は中国の古典文学、近現代文学を問わず、非常に幅広い業績を残しておられる。しかし、その中心はといえば、何ととっても魯迅研究であろう。それは魯迅の作品論ばかりではない。むしろ魯迅の生き様を見つめてきたとでも言うべきご研究である。ご本人の言葉をお借りすれば「わたしの関心自体が専ら彼の生き方というか、その人自身に向いている」（『ふくろうの声 魯迅の近代』跋）結果であろう。

周知の如く魯迅は初めから文学作品を書いたわけではない。ある期間ずっと埋もれた古典の資料の収集に情熱を注いだ時期があり、古典の研究者、小説研究者としての面をもちあわせている。その成果が『古小説鈎沈』であり、『中国小説史略』であるといえる。魯迅の生き様に関心が向いていた中嶋先生のご研究も、当然の如くこういう方面にも向けられた。そうしたご研究の成果としては、神戸外大に赴任されて間もない87年から『神戸外大論叢』に陸続と発表された「中国小説史略考証」、また92年からやはり『神戸外大論叢』に連載を始められた「『古小説鈎沈』校本」などがある。かくして『神戸外大論叢』に、一年で複数本の論文を投稿される常連となられた。

さらにそうした業績を纏められることにも情熱を傾けられた。その皮切り

が平凡社東洋文庫から上梓された魯迅『中国小説史略』の訳注であろう。この訳注の「注」部分には「中国小説史略考証」の成果が反映している。01年には主として同人誌『颶風』などに発表された魯迅論を纏められ、『ふくろうの声 魯迅の近代』（平凡社選書）として上梓された。さらに03年には科学研究出版助成金により『「古小説鈎沈」本文研究』第1巻～第4巻を出版され、先の『「古小説鈎沈」校本』とあいまって、一連の『古小説鈎沈』校本は完成したといえるであろう。こうしてみると、中嶋先生は次から次へと大規模な業績を残されているように私には思えるのであるが、ご本人は、「私の仕事はまさに多くそうで、狙いは遠大だが、完成したものがほとんどない」（『ふくろうの声 魯迅の近代』跋）と謙遜されている。

先生が外大に赴任され、研究面、教育面においてこれまで外大にはない新風を吹き込まれたのは間違いない。そこにおられるというだけで存在感があった先生である。

私にとっての先生の印象は、凜とした清潔感と“学識淵博”とでも表現すべき博学さである。「凜とした清潔感」はお会いする前から感じていたことであり、それは多分先生の文章から感じたものではなかったかと思う。お会いしてからはますますその清潔感を感じる度合いが強まった。そうした先生を拝見していると、私は知らず知らずのうちに「孤高の人」という言葉が浮かんでくる。学会などという組織にはほとんど与されず、常にマイペースでご自身の研究を進められていく。その姿が私にそういう印象をもたせるのであろう。

学識に関しては、とにかくにも博学だ。中国の書籍については、恐らく『中国小説史略』や『古小説鈎沈』などを手がけておられたから、いきおい中国の書籍に詳しくなられるということはある程度関係しているかも知れないが、どうもそれだけではないらしい。根っからの読書好きであることが起因しているのであろう。神戸外大は、漢籍、中国語図書の蔵書にかけては単科大学としては全国有数の量を誇っているが、これは前任者の努力もさるこ

とながら、中嶋先生に因るところが大きいといえる。赴任されてから、書籍の収集にはなみなみならぬ努力をはらわれてきた。またそうした書籍のみならず、中国のあらゆる面の知識が豊かであることにも、私が舌をまいたことがしばしばあった。

ここで極めて個人的な思い出を綴ることをお許し願いたい。そう、かれこれ20年前になろうか、何の予告もなくいきなり先生のご自宅を奇襲攻撃したことがあった。我が外大にお迎えしたかったためである。全く面識ない先生にどう近づこうか考えた末のことである。当時、先生が主宰されていた『颯風』の記事などを通じて、何となく「この先生は『お伺いしたいのですが、何時がご都合よろしいか』とアポをとれば、『用がないから来なくていい』と断られそうだ」と感じていたためだ。そこで何も言わずにご自宅へおしかけたのである。ところがものの見事に“扑空”であった。そこである人を通じてお会いできるようにしてもらった。しかし結局は外大赴任を断られた。その主たる理由は「自宅から外大までが遠すぎる」ということだったのだが、その表現がまた中嶋先生らしい。「残り少ない人生の大半を、電車の中で過ごすかと思うとイヤになる」と。そういうふうに言われると、私は逆にいよいよこの先生に来ていただきたいと思うようになり、ますます熱心になってお誘いした。それで根負けをされたかどうかはわからないが、ようやく首を縦に振ってくださった。そして外大にお迎えしたまではよかった。赴任後初めての教授会でのことである。着任された時のご挨拶がこれまたふるっていた。開口一番「佐藤さんの口車に乗せられて外大へ来ました」と。これには参った。と同時に「中嶋先生らしいな」とも思った。

先生はお酒を嗜まれる。それもどうやらワインが一番のお好みようだ。それもあってか、ビールを嗜まれる時でも、グラスを少し揺らせるのが癖のようだ。退官を前にしての歓送会で、何時も何か一言おっしゃる先生が、「旨い」とひと言おっしゃったあと、何もおっしゃらずいかにも美味しそうにワインを飲まれていた姿が印象的だった。そのワインがよほど気に入られ

たとみえる。何かしらひと言おっしゃらないと気がすまない先生が何もおっしゃらなかったのだから。

心的負担を抱え込みたくないと、名誉教授称号の授与を拒否された先生のことである。「これからもますますのご活躍を」と言いたいのはやまやまであるが、そうストレートに言うにはあまりにも無粋で、また心的負担をおかけするのではと、どうも気がひける。「何時までもお元気で」という言葉で締めくくりたい。そして心から「永年ありがとうございました」の言葉とともに。